

「つつつ!! 放せつ!! あたしのガントレットに……聖なる甲冑に触れるなつ!!」

そう言いながら全力で触手を引きはがそうとするのだが、ただ堅いだけではなく奇妙な弾力性としなやかさを持つ肉縄はどれだけ力を込めて引つ張つてもゴムのようにわずかに伸びるだけ。まるで接着されたかのように金色の籠手に貼り付き、離れる気配は全くなかった。

シスターライラの最大の武器である拳が封じられた今となつては、教会でも有数の武闘派といつてもただの少女に等しい。魔と闘う術を封じられた少女の体に情け容赦なく触手が絡みついていった。

触手の表面に為体の知れない粘液がまぶされていた。それはライラの鍛え上げられた肉体に密着した戦闘修道服にべったりと貼り付き、不快感を与えてくる。……いや、不快なだけではなかった。粘液が聖衣の防護を通り抜け、皮膚に触れたとたんその部分が熱く火照りだしたので。

媚薬は悪魔にとってはアクセサリーのような物。聖なる守護に守られた修道服とはいえ、直に長時間塗布されてはひとたまりもなかった。

「く……イヤらしいことしかできない腐れ悪魔めが……」

ぬちぬちと淫らな粘り音を立てる触手が戦闘修道女の乳房に絡みつき、ギョウつとくびり出すように巻き上げてきた。軽い痛みを覚えるぐらいに絞り上げられると息が詰まりそうになる。わずかな苦痛とは同時に産み出された快感を何倍にも増幅させる。乳芯から甘いさざ波がわき起こり、肉球全体を満たしてから先端へと集まっていた。熱いわだかまりが真っ白な乳肌の頂きで、鮮やかな桜色に色づく乳首に押し込まれていく。乳頭はあつという間に硬度を増し、小指の先ほどまでの大きさに膨れあがつた。

もちろん淫らに長けた悪魔が、戦闘服を押し上げて存在を主張する乳首を見逃すはずもなかった。太い触手がくばあつと開き、中から数本の小触手が現れる。もちろん粘液にしつとりと濡れたそれは、ライラの突起に強く絡みつき、きつく締め上げた。キュイっつ!!

「ふっくうううっ……!!」

乳首から強烈な快感電流がわき起こり、引き締まった背筋が勝手にきつくのけぞつた。細い触手が繊細にかつ力強く締め上げ、粘液の滑りを借りて柔らかく抜き上げ、戦闘修道女の可愛らしい乳首を可愛がり続ける。その度にライラは髪を振り乱し、ブーツの底を強撞いて悶えるしかなかった。

「うっく……ふううー! あ……おっ……!!」

それでもライラは必死で喘ぎ声がこぼれるのを押さえた。ここで弱みを見せては悪魔につけ込まれるだけ。なんと少しでも耐えて一撃食らわせなければ……。

(私の気が、済まないじゃない!!) つ……うっ……このエロ悪魔、絶対殴り殺して

やる!!)

快感でも桃色に染まりそうになる脳裏に闘争心を満たし、戦闘修道女は拳を固く握りしめる。ほんの一瞬でも隙があればこいつをぶち込んでやる。その思いで徐々に体を蝕む快楽に必死に耐えようとしているのだ。

しかしそんな抵抗を打ち砕かんとばかりに悪魔は新たな責めを始動する。ライラの太ももほどもあるうかという太い触手が、彼女の引き締まった股を割つて、熱く湿り始めた股間にあてがわれたのだ。

「ひゃんっ!?」

ライラは思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。奇妙な熱さを持つ触手は、全体が見えぬほどの細かい繊維で覆われていた。その羽ぼうきのような肉塊は戦闘修道服越しに股間に強く密着し、なんとブラッシングを始めたではないか。粘液をまき散らしながら、がしゅっ! がしゅっ! と強烈に前後運動を繰り返す、少女のふっくらとした肉丘を押しつぶしながら強く擦り上げる。

「かつふわあああああつっくつ!!」

ライラの全身が弓なりにしなった。小さな爆発が何度も股間で炸裂し、その度にガクガクとライラの顔がのけぞつてしまう。乳首責めに連動して硬度を増していたクリトリスが、無数の繊維に押し揉まれたのである。もちろんその責めは一度で終わるワケがなかった。前後運動は嫌味なほどゆつくりと、そして激しく繰り返される。何度も何度も敏感な肉芽がたくましい触手本体にゴリゴリと擦られ、無数の繊維が細かい打撃を加えられた。パンチングボールのようにぶるぶるとはじき飛ばされるたびに下腹部でパチパチとスパークが起こる。

(だ……あああつく、そこ、そこ……キツいっ……!!)

戦闘修道女の鍛え上げられた肢体が、一撃ごとに壊れたおもちゃのようにガクガクと震えた。そして、触手が蠢くたびに股間からびゅるつと糸を引いて、甘酸っぱい液体が飛び散り始める。震えるたびに周囲にふわつとまき散らされるのは乙女の汗と入り交じり、周囲に淫らな匂いが濃くなつていった。



肉で作られた濁々しい聖杯には、

なみなみと濁ったピンク色の液体が

滲えられていた。数百人の男の精

液と女の愛液を混ぜ合わせ、聖杯か

ら発せられる淫気を吸収させた淫液

である。それはもう媚薬などという

言葉では生ぬるい、女殺しの魔液。

「ポ……ポクに何をやる気だ……」

「ポ……そんなのじゃ、ポクは、ポクは、

……！」

「そう言い放つシスター、エリー

だったが、まだあどけなげの残る顔

には明らかにおびえの感情が浮か

んでいた。歯をかちかちと鳴らし、

見開いた瞳は自分の股間に向けて傾

けられようとしている聖杯に釘付け

になっている。

「史上最年少で修道戦士見習いにな

ったエリーの矜持だけが、あまり

の恐ろしさに泣きわめくことを押し

とどめている。

「サイの足のような形をした触手が

エリーの戦闘修道服の股間部分を横

にずらした。まだ縦割れにすぎない、

固く閉じた陰唇が露わになる。

「また何物をも知らない純血の地点

めがけて聖杯が傾けられた。スライ

ムのように粘った粘液がゆっくり

筋垂れ落ち、陰唇へと降り注いだ。

「っ……」

「ひやりとした感触が股間に走り、

背筋がぶるつと怖気だつ

「粘度の高い液体はエリーが震えた

ぐらいでは全く動じなかった。その

まま重力に任せてスジの中へと入り

込みながら、ねっとり下腹部の未

発達な丘を滑り落ちて行く。

「うあつ!? あーっつああああ

ああつ……!!」

「粘液の薄い膜が少女の陰唇を覆っ

てから数秒後、唐突にエリーの恥す

かしい箇所が熱く火照り始めた。燃

えるようなでもなく、焼けるような

でもなく、エリーの知っている単語

では形容しがたいような感触だが、

とにかく『熱い』という感覚だけは

確かだ。未熟な官能が魔液の暴力

的な力で無理矢理開呼び覚まされ、

きつちりと閉じていたはずの陰肉割

れがふつくと膨らみ、小さな膣孔

すらが露わになりそうなほどほころ

んでしまった。

「そのスキを悪魔兵は見逃さない。

サイのような触手が少女の陰唇を大

きくくつるげさせてしまったのだ。

「エリーが痛みを感じるか感じない

か、ギリギリの所までくばあつと開

いてしまうと、またつるつるな肉壁

が見えてしまう。

「そこへ、たつぷりと女殺しの媚毒

が滑り込んでいった。

「……!! あああああああああ!!

ああああ、ポっつ、ポクのお腹

……もえるううっつ!! 火がっ

いてるよおおお!!!」

「粘液が腔にべつとりと貼り付きな

から、奥まで滑り落ちていく。その

感触がエリーにはイヤと言うほど

解った。じゅうじゅうという音すら

立てているのではないかというほど

の熱さとむずがゆさが下腹部一杯に

広がり、おへその下がわけもなく

きゅんきゅんと疼きまくってたまら

ない。もし手が自由ならば指を入れ

て掻きまくりたい位だ。心臓も狂っ

たかのように早鐘を打ち、乱れた呼

吸を押さえられない。

「上手く穴へ入らなかつた媚毒は、

代わりに肉割れの上で包皮に守られ

ていた小さなクリトリスにたつぷり

と入り込んでいった。わずかな皮の

隙間に入り込み、肉豆の表面にたど

り着く。

「うあうううっつ!!? そ、そこ

なに!? そっ、こおおっつ!!」

「エリーの身体が大きいのけそっ

た。魔液の侵略を受けたクリトリス

はあつという間に感度を増し、包皮

と擦れている感触ですら心臓を突き

刺すような鋭い快感をもたらしてく

るのだ。あつという間に堅く突ると、

包皮責めからは免れたが今度は流れ

来る粘液に舐めしやぶられているか

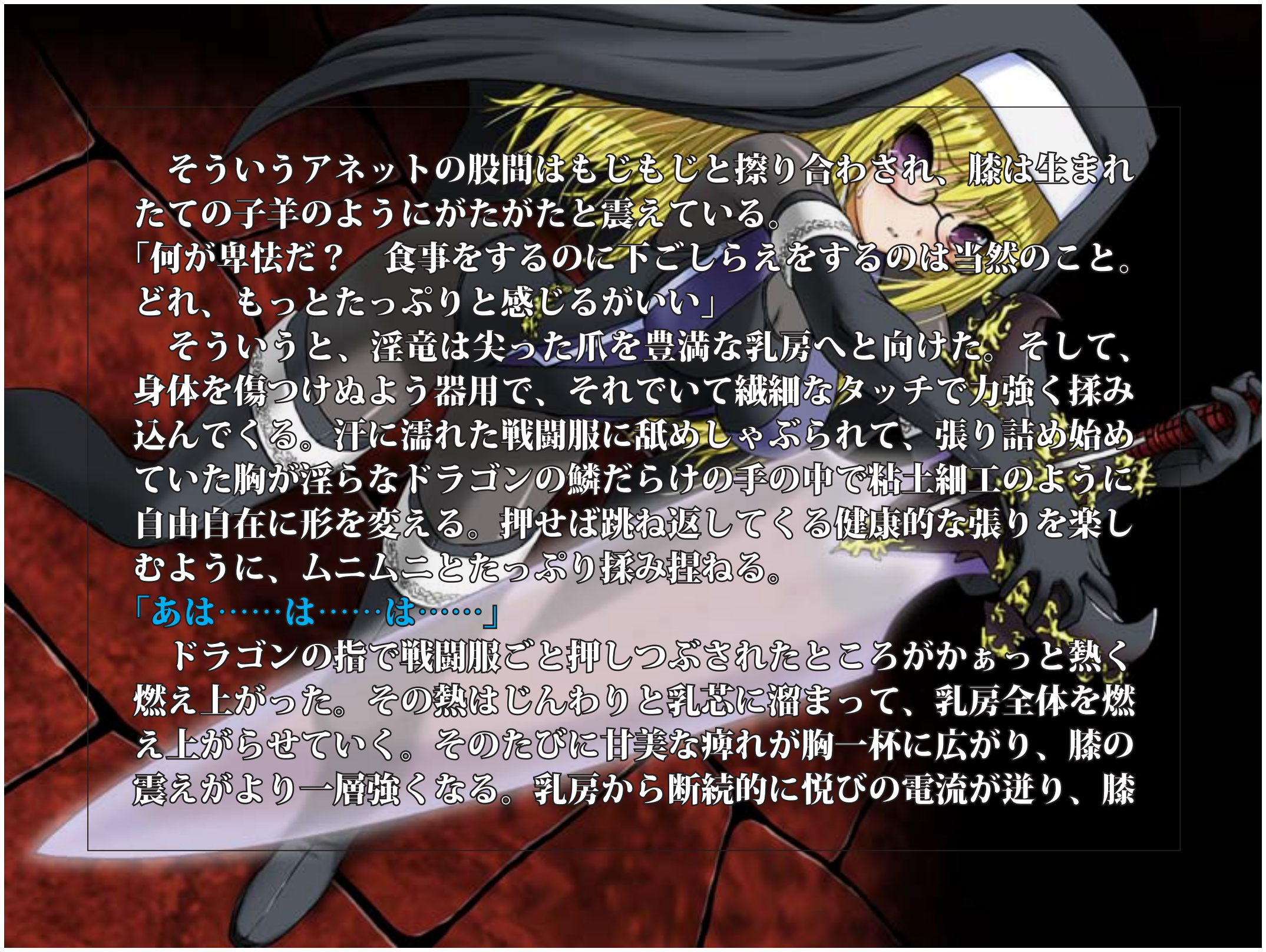
のような、子宮にわたかまる快感が

わき起こる。

「あああああつっ、ポクの身

か
らだあああつ、ポクの身体 おか
ひくなつちやうよおおっ……!!」





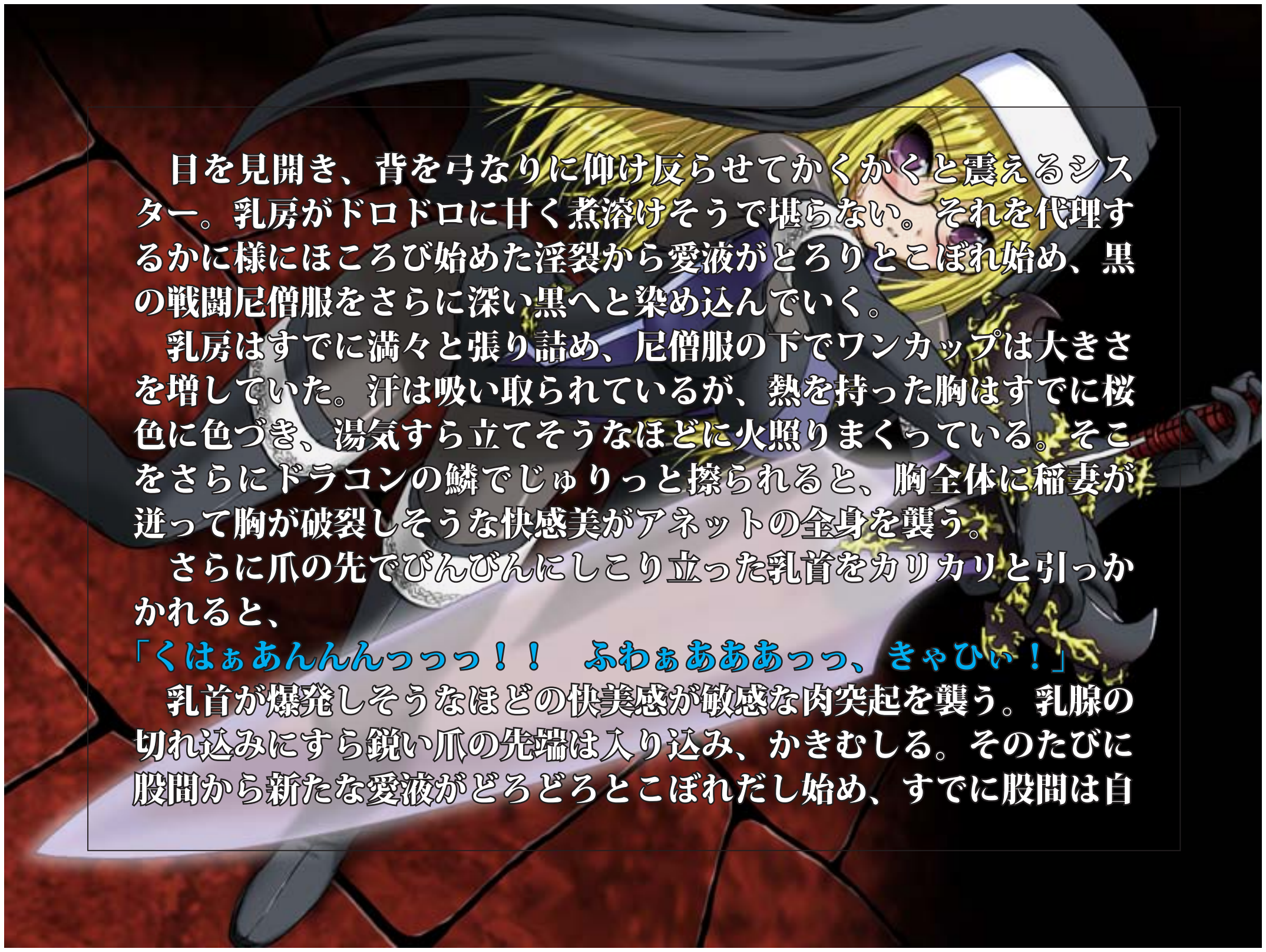
そういうアネットの股間ほもじもじと擦り合わされ、膝は生まれ
たての子羊のようにがたがたと震えている。
「何が卑怯だ？ 食事をするのに下ごしらえをするのは当然のこと。
どれ、もっとたっぷりと感じるがいい」

そういと、淫竜は尖った爪を豊満な乳房へと向けた。そして、
身体を傷つけぬよう器用で、それでいて繊細なタッチで力強く揉み
込んでくる。汗に濡れた戦闘服に舐めしゃぶられて、張り詰め始め
ていた胸が淫らなドラゴンの鱗だらけの手の中で粘土細工のように
自由自在に形を変える。押せば跳ね返してくる健康的な張りを楽し
むように、ムニムニとたっぷり揉み捏ねる。

「あは……は……は……」

ドラゴンの指で戦闘服ごと押しつぶされたところがかぁっと熱く
燃え上がった。その熱はじんわりと乳芯に溜まって、乳房全体を燃
え上がらせていく。そのたびに甘美な痺れが胸一杯に広がり、膝の
震えがより一層強くなる。乳房から断続的に悦びの電流が逆り、膝





目を見開き、背を弓なりに仰け反らせてかくかくと震えるシスター。乳房がドロドロに甘く煮溶けそうで堪らない。それを代理するかに様にほころび始めた淫裂から愛液がとろりとこぼれ始め、黒の戦闘尼僧服をさらに深い黒へと染め込んでいく。

乳房はすでに満々と張り詰め、尼僧服の下でワンカップは大きさを増していた。汗は吸い取られているが、熱を持った胸はすでに桜色に色づき、湯気すら立てそうなほどに火照りまくっている。そこをさらにドラコンの鱗でじゅりっと擦られると、胸全体に稲妻が迸って胸が破裂しそうな快感美がアネットの全身を襲う。

さらに爪の先でびんびんにしこり立った乳首をカリカリと引っかかれると、

「くはぁあんんっっ!! ふわぁあああっっ、きゃひい!!」

乳首が爆発しそうなほどの快美感が敏感な肉突起を襲う。乳腺の切れ込みにすら鋭い爪の先端は入り込み、かきむしる。そのたびに股間から新たな愛液がどろどろとこぼれだし始め、すでに股間は自



分が放った蜜で真っ黒に変色していた。

「くくく、そこも切ないのだろうか？」

淫竜はそういって、自らのしっぽをアネットの股間に差し入れた。必死に股を閉じようとするが、もう腰に力はほとんど入らなかった。べたべたに濡れた戦闘尼僧服の股布に鱗がびっしりと付いたしっぽがあてがわれ、一気に引き抜かれた。

じゅりじゅりじゅりいっ、こりいっ！！

「きゃひいいいいいいいいいっっっっっ！！！！」

淫らな液でどろどろに濡れた股間をやすりがけされ、アネットは全身を大きく仰け反らせた。大陰唇が布越しに擦り立てられ、無数の小電流がバチバチと股間で炸裂した。淫裂はぱっくりと割られ、小陰唇、膣孔までもがたっぷり擦り上げられた。